大　賞

丸森中学校　3年　古川　結晶

表題「三百十六ページの旅」

書籍名『表参道のセレブ犬とカバーニャ要塞の野良犬』

私は、旅に出たかった。でも、そんなことをしたら世間から冷ややかな視線を向けられる今。だから私は、本の中で旅をすることにした。

当書では、ニューヨークに行った時の話から始まり、キューバ、モンゴル、アイスランドの三か国をユーモアを交えながら旅をする。社会と自分との距離を程よく保つために、自分との対峙を繰り広げ、存在意義を考える著者に私は心動かされた。

三か国の中で、一番心に残っている国はキューバだ。まず、キューバは社会主義らしいがピンとこなかった。同時に資本主義という言葉を思い出してしまったので、更にこんがらがっていた。次の文を読むまでは…。

「日本の自由競争は機会の平等であり、結果の不平等だろう。キューバの社会主義は結果が平等になることを目指していて、機会は不平等といえるのかもしれない。」

社会の成績は、毎度三の私でも資本主義と社会主義の違いが分かった。無駄を削ぎ落とし、かつ本質をついているこの文は苦手な社会を少し好きにさせてくれた。

マレコン通りの堤防に佇みながら、父親との記憶を辿る章は最も感動的だった。軽くなりすぎず、重くなりすぎず、「父親」というこの世で一番の味方を失った心境や心情が紡がれており、理念に深く感動した。

万人が気になるであろうタイトル「表参道のセレブ犬とカバーニャ要塞の野良犬」。自分を着飾り、リードでつながれた何不自由ないセレブ犬と、誰かに飼いならされない自由を選んだ野良犬、あなたはどちらが幸せだと思うのか。価値観は人それぞれ。だから、社会に出た時、周りの人と意見や考えが合わなかったり、苦労することがたくさんあると思う。でも私は、カバーニャ要塞の野良犬のように、どんな時でも自由に泥臭く生きていきたい。